

## 第2回総長選考・監察会議議事録

1. 開催日時：令和7年5月21日（水）10：00～11：40
2. 方法：オンライン会議（Zoom）
3. 出席者：遠藤、国谷、國土、小林、酒匂、佐藤、関根、板東、岩間、宇野、浦野、粕谷、寺田、平地、古村 各委員
4. 陪席者：亀井、山口 各監事
5. 議題
  - 1 求められる総長像について
  - 2 次期総長選考プロセスについて
  - 3 その他
6. 配付資料
  - 1-1 求められる総長像（案）
  - 1-2 次期総長選考に向けた主な検討スケジュール（イメージ）
  - 2-1 次期総長選考に向けた課題検討
  - 2-2 代議員会選出第1次総長候補者氏名（イメージ）
  - 3-1 東京大学総長選考・監察会議議長所信表明（議長就任にあたって）
  - 3-2 令和7年度第1回総長選考・監察会議議事要旨（案）

### 7. 議事

【板東議長】 それでは、ちょうど定刻になりましたので、今年度第2回の総長選考・監察会議を開催させていただきます。本日は、通常ですと経営協議会の前にということですが、今回特別に会議日程を設定させていただきました。大変お忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。

それでは、まず事務局から本日の委員の出席状況など、連絡事項の確認をお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【事務局】 事務局でございます。よろしくお願いいたします。本日は15名の委員の皆様にご出席いただいておりますので、定足数を満たしております。なお、A委員におかれましては、本日はご欠席となっております。それから、B委員がご都合で少し入室が遅れる旨、承っております。

続きまして、陪席者についてでございます。C監事、D監事、総務部長、法務課長、本

部法務課法規チームが陪席させていただきます。また、法学政治学研究科の穴戸先生、社会科学研究所の田中先生にもご陪席いただいております。

続きまして、傍聴者についてですが、本日は傍聴者の方はおられません。

続きまして、配付資料の確認でございます。本日の資料は、事前にお送りさせていただいたPDFファイルをご覧ください。議事次第に記載のとおり、資料としては6点、そのほか席上配置資料として2点、「令和7年度総長選考・監察会議関係資料」、それから別冊として「令和2年度総長選考関係資料」がございます。

続きまして、議事の記録・公開についてでございます。会議運営に関する了解事項に基づき、本日の議事の記録については録音並びに書面による議事要旨及び議事録といたします。公開については、録音による記録は公開いたしません。議事要旨及び発言者を匿名化した議事録は公開いたします。なお公開は、東京大学ホームページ、総長選考・監察会議ページに本会議終了後に配付資料とともにいたします。

発言時のマイク操作についてでございます。本日はオンラインの開催とさせていただきます。ご発言時以外はマイクをオフ、発言の際は挙手ボタンを押していただき、議長からの指名の後にマイクをオンにしてご発言をお願いいたします。

続きまして、第1回議事要旨についてでございます。本日の資料として事前にお送りさせていただきました前回の「第1回総長選考・監察会議議事要旨（案）」、資料3-2につきまして、何かお気づきの点がございましたら、会議終了までにお申し出願います。事務局からは以上でございます。

**【板東議長】** はい、ありがとうございます。それでは、議題1の「求められる総長像について」の議論に入らせていただきます。資料1-1「求められる総長像（案）」をご覧くださいと思います。

これまでの検討経緯を簡単にご説明、振り返らせていただきますと、求められる総長像は今まで比較的抽象度の高い記載ぶりとなっておりますけれども、令和6年度の3月14日に開催した第13回の総長選考・監察会議では、申し送りに従って記載内容について具体化した記載ぶりとするか、現行のとおり比較的抽象度の高いものにするかについてのご議論をいただいたわけでございます。その会議において、現行のような抽象度の高い記載でまとめていこうということ、それから、ご議論の結果、2項に「能動的に」という言葉を入れるということを決めたわけでございます。

その後の経営協議会でも、例の国際卓越研究大学についての申請、それに伴う構想についてのご説明などがあったところでございますけれども、そのような状況なども踏まえまして、もう少し内容についてご議論が必要な部分があるのかなということで、4月に改めてこういった国際卓越研究大学制度への東京大学としての対応の今後の状況なども考えた上で幅広くご意見をいただきたいということで、再度事務局からメールを出していただいたわけでございます。

委員の皆様には、お忙しい中ご検討をいただきましてありがとうございました。幾つか

の貴重なご意見をいただきました。学内ワーキンググループで再度ご検討いただきましたので、後でご説明いただきますけれども、本日の資料のとおりブラッシュアップした案をお出しいただいているところでございます。これは後でご議論いただきたいと思っております。

なお、今後のスケジュールについてご説明いたしますと、「次期総長選考に向けた主な検討スケジュール（イメージ）」、今お示ししているところでございますけれども、正式な決定は9月以降ということになります。パブリックコメントなどを経るということがございますので、決定は12月ごろの予定となると思っておりますけれども、その前の段階として6月の経営協議会、教育研究評議会にそれぞれ意見交換も予定しておりますし、それから運営方針会議などにもご意見をいただくという過程があるわけでございます。本日は6月の経営協議会、教育研究評議会にお示しする案をご議論いただいて、一旦固めた形にしておきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、早速でございますけれども、学内ワーキンググループから検討状況についてご説明をいただきたいと思っております。E委員によりしくお願い申し上げます。よろしく願いいたします。

**【E委員】** ありがとうございます。Eでございます。今、板東議長からご説明がありました学内ワーキンググループでの議論の結果を今からご紹介したいと思っております。

今スライドに映っております「求められる総長像（案）」に見え消しで入っていると思っておりますけれども、主に3点指摘をいただきました。それぞれについてご説明していきますが、まず2項めについては、「開学以来の伝統を活かしながらも」の後に「鋭い先進性を持って」という単語を加えることによって、伝統を活かすことだけに固執するのではないということ、そういった姿勢を見せるということを案として決定しております。

次に第3項に関してですけれども、「適切にリーダーシップを発揮」の「適切」というのがやや調整型というか、ちょっと後ろ方向に向いているんじゃないかというご意見をいただきました。先ほど議長からもご説明があったとおり国際卓越研究大学へ向けての推進力がますます必要になってくるということも考慮して、本学における総長のリーダーシップとは逆に単に強力なだけであるというのでもやはりだめではないかという考えを我々学内は特に持っております。バランスを保ちつつも、必要な場面においてはしっかりと強力なリーダーシップを発揮することが求められているのではないかとということで、そのような卓越したリーダーシップの意味合いを込めて、「適切」という単語から「優れた」という単語に修正しまして、「優れたリーダーシップを発揮し、効果的で機動的な組織運営を行う能力と実績」というふうな文章に変えさせていただきました。

最後ですけれども、もともとは「協調的人類社会の実現に貢献」という表現が書かれているんですが、これが何を意味しているのかわかりにくいといったご指摘をいただきました。学内のほうとしても、これはやっぱりわかりにくいなということは多くの学内ワーキンググループの委員が持っていた印象で、それを少し具体性を上げるという形で、「協調的

人類社会」というのは全世界レベルのことを考えてということなので、その一案として「国際協調による人類社会の発展」というのを、今「or」という形で併記している状況であります。

ただ一方で、「国際協調による人類社会の発展」というと、かなり「協調的人類社会」というもともとの単語に比べると、具体性は上がったんですけども範囲としては非常に狭くなっていると。もっと言うと国際協調というものに特化しているような印象を与えてしまうのではないかといったご意見もいただいております。ですので、今日ここで議論していただきまして、最初のほうの「協調的人類社会」という比較的ブロードな意味合いを持たせるような表現のままでいいのか、あるいは「国際協調」といった単語を入れるか。あるいはまた別案でも構わないんですけども、そういったことを少し議論していただきたいと思っております。

なお、4月に開催されました第1回総長選考・監察会議において、「次期総長選考に向けた課題に関するアンケート」の結果を共有させていただいております。このアンケートの中で東京大学の課題とか将来像を踏まえた総長像のあり方についてもお聞きしておりまして、求められる総長像というのは抽象度が非常に高い記述になっていることもあって、学内ワーキンググループとしましては、このいただいたご意見については、おおむね現在の5項から成る「求められる総長像」に含まれるのではないかと整理となりました。学内ワーキンググループからのご説明は以上のとおりです。よろしく申し上げます。

**【板東議長】** ご説明ありがとうございます。それでは、求められる総長像についての今の案につきまして、ご質問、ご意見をいただきたいと思っております。

それから、先ほどのご説明に一言加えさせていただきますと、5番目のところがちょっとわかりにくいねというのは、私もそういうことで意見を言わせていただいたんですけども。この「協調的」ということで今まで込めている中には、今東大でかなり重点的に推進しておられる多様性とか包摂性とか、そういった話についても含まれた形で言っているのかなという感じもあって、そういう意味で国際協調云々ということはやっと狭いのではないかとご指摘もあったところがございます。こういうところも含めてご議論いただければありがたいなと思っております。

それでは、今のご説明いただきました改訂を含む案につきまして、ご質問、ご意見をいただければありがたいと思っております。よろしく願いいたします。――それでは、F委員、よろしく願いいたします。

**【F委員】** ありがとうございます。今、議長がおっしゃった点は私がすごく気になっていたところです。東大は今現在、多様性、インクルージョンやダイバーシティをかなりキャンパスの中でもメインの価値観としてはっきりと打ち出しています。

これを全部取って「国際協調による人類社会の発展」ということになるのと、国際協調で何をするのかということがよくわからなくなる恐れがあることに加えて、国際協調という言葉のポリティカルなイメージが気になります。特に現在の様に戦後の価値観が大きく崩

れようとしているとき、民主主義国家による共通した国際協調ということが根底から崩れ去ろうとするときの国際協調という言葉の持つ意味は、かなり流動的になっていると思われます。

今申し上げたようなインクルージョン、多様性とか包摂性という価値観の取り扱いと、「国際協調」という言葉の持つあいまいさから、この案にはちょっと気になるところがあると思います。

その意味でただ、東京大学は現在そうだけれども、インクルージョンとかダイバーシティということは今後の求められる総長像では取り立ててメンションする必要がないという判断がどこかにあるのであれば、また違う話なんですけれども。こういった価値観はもうこれからは東大も必要ないんだというような考えでこういう代替案が出てきたとは思えないので。そういう意味では、「協調的人類社会の実現」を「国際協調による人類社会の発展」と変更するのは、今言った点から私は少し抵抗がございます。

したがって、もう一度「協調的人類社会の実現」は何でだめなのかということに振り返って考える必要があると思っています。余りに抽象的過ぎるというご意見が強く出たというふうに理解すべきなんでしょうか。

【板東議長】 「協調的」ということだと、意味がちょっとわかりにくいということのかなと思います。例えば「持続可能」とか「多様性に富んだ」とかというようなのですと、イメージしやすいんですけども。

【F委員】 そうですね、おっしゃるとおりです。

【板東議長】 「協調的人類社会」と言ったときに特に何を。いろいろ突き詰めて考えると、そういう包摂性とか多様性とか、いろんな要素がそこに入ってくるということがわかるんですけど、ちょっと一般的にはわかりにくいかなということ。

【F委員】 そのご意見も賛成です。例えば「持続可能で多様性に富む人類社会の実現」とすると持続可能性かつ多様性が入っているので、「協調的」というあまりにも抽象的な言葉よりも、「持続可能で多様性に富む人類社会の実現」というほうが具体的な感じにはなってくるのかなというふうに思います。

【板東議長】 私もそんなのが一つの案にはなり得るのかなとは思っておりました。F委員がおっしゃったとおりです。

【F委員】 すみません、私の意見です。皆さんの意見もあると思います。以上です。

【板東議長】 それでは、G委員、お手が挙がっていたかと思いますので、よろしく願います。

【G委員】 すみません。今、「持続可能で協調的」なということについての発言があったので、手を下ろしたところでした。私もこの「国際協調」という言い方では国という単位で物を考える縛りとなるような印象を受けました。今、社会は国という単位を超えて、皆いろんな価値観を求めている中であって、ここで「国際協調」と「国」という言葉を入れてしまうことによって狭い意味になってしまうのではないかと危惧し、「国際協調」という

のはやめたほうがいいなと思いました。

「協調的人類社会」という意味も、よくよく考えれば、非常に曖昧ではあるんですけども、必ずしもわからないものではないです。今後人間社会がどういう方向に行こうとしているのかということが必ずしも明確でない、あるいは国とか社会とか国際関係の今後の展開が極めて不透明な中で、「協調」というのがむしろ何を意味するのか。東大にとって人類社会における協調というのがどういった視点で語られるべきなのかということ、深掘りしていく時代なのかなと思っています。

私は「協調的人類社会」という言葉遣い自体については、曖昧であるけれども、むしろ曖昧であることが今の時代には合っているのかなと感じました。ただ、「持続可能で多様性に富む」というのは、もう少し「協調的」というのを具体的にしているという意味ではありだというふうには感じております。

【板東議長】 ありがとうございます。今のお2人の委員のご指摘いただきました点について、ほかの委員の方からもご意見などございましたらいただければと思いますけれども、いかがでございましょうか。――じゃあH委員、お願いいたします。

【H委員】 ありがとうございます。この「協調的人類社会」という言葉がどういう経緯で挿入されたのかは、事務局の皆さんに協力していただいて調べました。最初にこれが入った経緯は、国際平和とか国際協調という言葉がないというので、それに類する言葉を入れたいというのが大きな要因だったようです。ただし、今委員の皆様からご議論のように、国際協調という言葉自身、やっぱり国を前提とした発想でして、今となってみるとやや違和感があるというところがあるかと思えます。

また、代替する可能性としては、「人類の持続的発展」というのも出ていまして、結局それではなく「協調的人類社会」が残されたというふうに記録は残っているのですが、なぜ「人類の持続的発展」というほうはやめて「協調的人類社会」になったのかというところまでは、どうもはっきりとしたところがわからなかったというのが調査結果でございます。

ですので、現代の言葉からしますと、「協調」という言葉を残すというのも重要ですし、「持続性」も現代的にはそれと関連するという意味では加えることは適切であろうかと思えます。以上です。

【板東議長】 ありがとうございます。ほかにご意見いかがでございましょうか。今のH委員のご指摘ですと、ここはどういう文言にしたらいいという感じになりますでしょうか。

「協調」のほうを入れるということ。持続可能と。

【H委員】 今のとおり、「協調」という言葉は、どういう経緯で入れたかわからないんですけど、メッセージとしては重要だったということで、「国際協調」は確かに不適切かもしれませんが、「協調」という言葉は残したほうがいいんじゃないかと思えます。「持続性」というのは、ここに入れるのに適切な言葉がないかという議論が過去からございましたので、先ほどご提案のあったとおり「持続性」と「協調」という言葉を入れた形で書くのが現代的ではないでしょうか。「持続可能で多様性に富む」でも結構ですし、「協調」という

言葉を残してもいいかなとは思いました。

【板東議長】 ありがとうございます。ほかにご意見いかがでございましょうか。―― I 委員、お願いいたします。

【I 委員】 ありがとうございます。この「多様性」を入れるか入れないかなんですけど、先ほど F 委員がおっしゃっていたように、今の流れで大分多様性というのが押し潰されていくような国際社会になりつつあるので。改めて東京大学としてはその価値観は大切にしていってほしいというのも残しておくという意味でも、この「多様性」という言葉をあえて今の時代にちゃんと強調しておくのは重要なのではないのかなと思いました。

【板東議長】 ありがとうございます。それも重要なご指摘かなと思います。

【J 委員】 よろしいでしょうか。

【板東議長】 はい。J 委員、お願いいたします。

【J 委員】 私自身は「協調的」というのを残していただくほうがよろしいかなと感じています。というのは、「協調的」という中には多様性の観点も入ってございまして、サステナビリティそのものも協調性がないとサステナビリティを実現できないというのが私の感覚でございまして。そういう意味では、協調的な社会をつくること、それが相当大変なことだと思っておりますけれども、協調的社会というものをつくる努力、それがアカデミアとしてとても重要なことだというふうに思います。

政治の中ではなかなかこの協調的というのができないというのが現状だと思います。国単位になってしまうとできないというのもまた現状なんだろうと思っております。そうすると、国という枠を外す、そういうことが協調的という社会をつくる唯一の方法論なんだろう。だから、その観点で大学の役割として協調的社会というものを意識して、アカデミアという中でそれをつくり上げていく努力をするというのが、私はとても重要な機能だろうというふうに理解をしています。以上です。

【板東議長】 ありがとうございます。それでは B 委員、お願いいたします。

【B 委員】 私も皆様のご意見とほぼ同じなんですけれども、やはり国際を強調するよりも、もっと人類社会が全体として協調的に持続的に発展するという意味合いを強める文言にするほうがいいのかなと思います。「国際協調」というと、先ほどからお話が出ているようにポリティカルなニュアンスがあったり、国と国の縛りというような、世界との関係をむしろ強調するわけなんですけれども、やはりもうちょっとホリスティックに人類全体において東京大学が人類社会の持続的発展を協調的に進めるといったニュアンスが出るという方向性に賛同いたします。

それからもう 1 点、この 5 番以外のことでちょっと申し上げてよろしいでしょうか。

【板東議長】 はい、よろしく申し上げます。

【B 委員】 すみません、3 番目のことなんですけれども。「適切」という言葉を「優れた」に置きかえるというのは賛成でございまして、リーダーシップにもいろいろございまして、優れたと言ったときに人それぞれの捉え方がありまして、例えば「優れたリーダ

ーシップを適切に発揮し」というような、「適切」を少し違う場所、「適切に発揮し」というように残すということはいかがかなと。

やはりあまりにも強いリーダーシップを目指すのではない。この「優れた」の意味合いが曖昧であるがゆえに実際の候補者が出てきたときに「優れた」ということを考えるときのデフィニションがはっきりないだけに、優れたリーダーシップを適切に発揮する候補者を選べたらというふうに私は考えまして、「発揮し」の前に「適切」を残したらという提案でございます。

【板東議長】 ありがとうございます。私個人は、「適切に」という言葉に「優れた」ということを並べるところには若干違和感があるんですけど。「優れた」という中に、引くところも押すところも、あるいは調整をしていくところも、そういうのを含めて「優れた」とか「卓越した」とかいう話になる。押すばかりでは絶対優れたリーダーシップではないというふうに思っているので、「適切に」という言葉が何となく逃げにならないかなというのはちょっと気にはなるところではありますけども、このあたりは皆様のいろんなご意見をお聞きした上で決めればと思います。これは個人的な意見にすぎないわけでございますけども。ほかにもいかがでございましょうか。

【L委員】 すみません。よろしいでしょうか。

【板東議長】 はい。

【L委員】 皆様のご意見を伺いまして、5については私も「国際協調」というのは確かに少し適切ではないかもしれないと思いますので、もとの「協調的人類社会の実現」という案に賛成いたします。多様性は重要なのですが、今の画面に映写された文案を見ると「多様性」が2回出てくるので、最初を残すのでしょうか。「持続可能で協調的人類社会の実現」になるのでしょうか。ちょっと画面上、整理していただければと思います。

それから、3についてはB委員の意見を理解するのですが、日本語として形容詞と副詞があまりにも多いのはあまりよろしくないのかなと思いますので、「優れた」というほうに賛同したいと思います。以上です。

【板東議長】 ありがとうございます。ほかにも意見、いかがでございましょうか。――E委員、よろしく願いいたします。

【E委員】 皆様のご意見、よく理解できました。学内のことをお知らせしますと、DEIに関していうと、先ほどI委員からご指摘があったみたいに、それが戻っていく方向に今動いちゃってるというのに関して我々は危機感を持っているということ、つい先日、総長が外部に向けて発表いたしました。今後とも東大はしっかりと多様性、DEIというものを重視した形で大学運営を進めていくことを新たに宣言するということをやっていますので、後ろ向きの方角に行ってるというわけでは全くないですということを、まず一つお伝えします。

もう一つは、この「求められる総長像」という文章は、もちろんだろうという人がいいかということ募集するという意味もあるんですが、今日この後、議論しますけれども、総長

を最終的に我々この総長選考・監察会議が主体的に決めていくときの最後に、この文章に照らしてこの人が一番よかったというふうな形で言う必要がどうしても出てくると思います。

特に今回の総長選考に関していうと、後でご説明しますが、できるだけ透明性を保った形で進めていきたいということですので、ちゃんとこういう理由ですよと言うときに、例えば多様性とか具体的な項目があまりにも多過ぎると、そこにしか合わないような人しか選べなくなってしまうという部分もあります。

「協調的人類社会の実現」といった、比較的デフィニションは甘いんですけども、そういう中で我々総長選考・監察会議がベストな人はこの人だと言うための文章という意味合いもあると、我々としては考えております。そういう意味では、さっきL先生からありましたように、形容詞とか副詞をたくさん並べるとデフィニションが厳しくなってくるので、そこは少し甘く。それをもって抽象度が高いという表現になっていると思いますが、そういったものにしたほうがいいんじゃないかなということで、今回こういう案に最後落ちついているといったところをご説明いたします。以上です。

【板東議長】 ありがとうございます。ほかにいかがでございましょうか。――よろしゅうございますでしょうか。

具体的に、私も5番の「協調的」といったときに、ちょっと漠然とし過ぎるのかなと思ったんですが。先ほどからのお話で、いろいろな含意もあって、むしろかなり持続性から包括、多様性から、いわゆる協調的なのというところも含めて非常に含意がある深い言葉だということであれば、それで「協調的人類社会の実現」という、今の形のものを残させていただくということで、とりあえず、ご意見がいろいろなところから出ればまたご検討いただくとして、いかがでございましょうか。

それから、先ほどご指摘のように、「多様性」という言葉自体は教育研究活動の中での多様性の重視という話ではありますけれども、2のところに一応、今東大として取り組まれている多様性は書かれているということですので、あえて5番のところに多様性を書かなくても、東大としての取り組みのところは示されているかなという感じはいたします。

だから、5番のところは、よろしければもとの案の「協調的人類社会」ということで。説明のところは、今皆様からご議論いただきましたので、大分中身が、含意が明らかになってきたなという感じがいたしますので、それでとりあえず説明させていただくということで。もうちょっとわかりやすいこういう言葉をというご提案があれば、また再度ご議論いただくということになりますけれども、とりあえず経営協議会と教育研究評議会に出させていただきますのは現在の形にさせていただくということでよろしいでしょうか。――はい。

それから、3番のところで、もしこだわられるのであれば「適切に」というのを入れても構わないんですけど。先ほど申し上げましたように、「優れた」という中にはいろんなそういう要素が入っていると。押す、行け行けばかりがリーダーシップではないということで。これはリーダーシップもいろんな形があることを当然前提にしながらということだ

と思いますので、「適切に」という言葉は入れないほうがいいかなと私は思ったんですが、ここについてはご意見いただければと思います。

【J委員】 すみません、よろしいでしょうか。

【板東議長】 はい、J委員。

【J委員】 私自身は「適切に」というのはないほうがいいと思います。明確に「優れたリーダーシップ」、それだけで十分伝わるので。さらに「適切」というのをつけますと曖昧性を持ってしまうので、何に關しての適切性なんだという話にもなりかねないので、私は「優れた」だけでよろしいかと思います。以上です。

【板東議長】 ありがとうございます。合意形成の問題とか、幅広い構成員の支持を受け、といったような配慮もあるのかなとは思っています。

それでは、G委員、お願いいたします。

【G委員】 そもそも「リーダーシップ」というのは、その時々状況に対し適切にリーダーとして機能するための力を発揮する能力なので、あえてここで「適切に」と言わなくても良いのではないかと思います。

【板東議長】 ありがとうございます。それでは、ここは「適切に」は入れないという形でよろしいでしょうか。——はい。「優れた」という中に当然入っておりますし、リーダーシップということ自体も、今のご指摘のように、当然のことながらそういったことは入っているというふうに理解させていただければと思います。

【B委員】 了解いたしました。皆さんのご意見をお聞きして、「優れた」にきちっとした適切なリーダーシップが含まれているということで了解いたしました。

【板東議長】 はい、ありがとうございます。

それから、2番のところに「鋭い先進性を持って」ということを入れさせていただきました。前回、「能動的」ということを入れましたが、それにさらに「先進性」と入れさせていただきましたけど、これはこれでよろしゅうございますでしょうか。最前線を行くという感じがより強調されるということで、能動性と相まって、さらに東大としての積極的な姿勢が出ているかなとは思っています。

それでは、今のご議論の結果として、今表示されております形で、とりあえずの6月の諸会議にご説明をする形として一旦まとめさせていただくということでよろしゅうございますでしょうか。——はい、ありがとうございます。それではそういうふうにさせていただきたいなと思います。またいろんなところからいろんなご意見が出てくるかと思うので、この求められる総長像のところについては再度ご議論いただくことになると思いますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございます。

では、続きまして議題2の「次期総長選考プロセスについて」に入らせていただきます。本日は、次期総長選考プロセスもたくさんの要素があるわけでございますけれども、そのうちの「代議員会における第1次総長候補者の推薦における結果の取扱い」、それから「第2次総長候補者の絞り込み方法」につきまして学内ワーキンググループで積極的にご議論い

いただきましたので、その検討結果をご説明いただきたいと思っております。

それでは、まず「代議員会における第1次総長候補者の推薦における結果の取扱い」につきまして、これまでの取扱い、論点、検討の方向性などにつきまして、事務局からご説明をいただきまして、その後に学内ワーキンググループの検討状況についてE委員からご説明をお願いしたいと思います。それでは、まず事務局からご説明をお願いいたします。

【事務局】事務局でございます。まず、席上配置資料の別冊「令和2年度総長選考関係資料」の1ページ目、総長選考プロセスのイメージ図をご覧ください。本学の総長選考のプロセスの中で、第1次総長候補者は各部署の教授会構成員と教授会構成員以外から選出された代議員会という組織から推薦する方式と、経営協議会から推薦する方式の二つがございます。この二つの方法によって推薦された第1次総長候補者はおよそ12名程度になりますが、その後、総長選考・監察会議で辞退者を除く全員の面接を行い、3人以上5人以内に絞り込みを行います。この3人以上5人以内の候補者が、第2次総長候補者として意向投票の対象となります。

これからお話しさせていただく場面は、代議員会からの候補者が選ばれた際の結果の取扱いになります。席上配置資料別冊の「令和2年度総長選考関係資料」の2ページ目、「総長選考の基準・結果等の公表等の取扱いについて(案)」、こちらをご覧ください。第1次総長候補者の氏名や情報については、これまでは学内にも学外に対しても公開は行っておりませんでした。第1次総長候補者は立候補制ではなく推薦されて選ばれており、第2次総長候補者に選ばれなかった方への配慮から、従来からその氏名を公表しない取扱いとしてきたとのことでございます。ただし、代議員会の投票が終了した際に、第1次総長候補者の氏名のみを50音順により、その席上において発表しておりました。

資料2-1のスライドの7枚目、一括版の資料ですと9ページ目に当たりますが、「代議員会における第1次総長候補者の推薦における結果の取扱い」の参考法令等のスライドの下に、「総長選考及び総長解任の申出に関する細則」を抜粋しておりますが、こちらに公表という形ではなく、出席した代議員に対して発表という形で行われておりました。「ただし、各第1次候補者の得票数及びその順位はこれを発表しない」とされておりますので、その場で発表するのはあくまで氏名のみでございました。また、代議員会の席上で集計し、すぐに発表したという流れから、候補者に通知する前に氏名を発表しておりましたので、仮に第1次総長候補者の中で辞退を希望する方がいらっしゃった場合も、その方の名前はその場で発表されていたということになります。

次のページに進んでいただきまして、資料2-1のスライドの8枚目、一括版資料の10ページ目、「選考プロセスと公開の時期」の「参考」の令和2年度総長選考の部分をご覧ください。このような流れの中で、令和2年度の総長選考では、代議員会からの推薦についての情報はこれらの方たちが知っていたということになります。まず、先ほどお伝えしたとおり、代議員会で集計が終了した際に、出席代議員に対して席上で氏名が発表されました。また、総長選考会議委員には、代議員会終了後に文書で代議員会選出の候補者氏名が

通知されました。こちらは席上配置資料の 50 から 51 ページに掲載しておりますが、総長選考会議委員限りとして氏名のみ 50 音順で通知されておりました。次のページに氏名だけがずらっと並んでいるものがございまして、ちょっと隠しておりますけれども、こういった氏名だけを通知しておりました。

なお、総長選考会議委員に対しては、面接のときに委員の席上に第 1 次総長候補者の氏名及び得票数を回収資料として置いていたということ、その後に代議員会の第 1 次総長候補者の氏名と得票数が漏えいした、インターネット上に登載されたということについては、「令和 2 年度総長選考関係資料」の 176 ページ、「令和 2 年度総長選考会議における総長の選考過程の検証報告書」の一部に掲載されてございます。

資料 2-1 の 6 枚目のスライド、一括版資料の 8 ページに、前回このような漏えいが起きたことから、その後の検証も行われておりますが、論点といたしましては、「総長選考会議の組織検討タスクフォース報告書」によりますと、「代議員会の投票については、投票結果を公開すべきかどうか、公開する場合には、誰に対して、どのような内容（氏名あるいは順位）を、いつ（とりわけ候補者が辞退を申し出る時期との先後）公開するかが、重要な検討課題と考えられる。」とされております。

検討の方向性といたしましては、申し送りやタスクフォース報告書によれば、「第 1 次候補者及び第 2 次候補者に関する情報については、選考プロセスの各段階の意味付けを明確にした後に、それぞれ公表内容、発信・提供の範囲、時期等について、経営協議会や教育研究評議会等、学内の意見も傾聴しつつ、選考の透明性確保の観点も含め、詳細に議論した上で決定すべき」とされています。事務局からの説明は以上でございます。

**【板東議長】** ありがとうございます。それでは、事務局の説明に引き続きまして、学内ワーキンググループの検討結果につきまして、E 委員から説明をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

**【E 委員】** ありがとうございます。そうしましたら、今映っております「代議員会における第 1 次総長候補者の推薦における結果の取扱い【学内WG検討結果】」といったスライドを使いましてご説明いたします。今、事務局から詳細なご説明があったとおり、前回の総長選考で最後いろいろごたごたが起きてしまったところをとにかく今回起こさないということを大前提、一番の大きな目標としていろいろ種々議論いたしました。

前回までの問題点としては、やはり総長選考といったプロセスを経たにもかかわらず、ほとんどの情報というのは、外、あるいは代議員会も含めてですけど、学内の構成員にすらあまり公開されていなかったというところがあったために、総長選考・監察会議の中で何が行われているのかというのが全くわからないまま第 2 次総長候補者が決まり、意向投票の結果、総長が決まるといった形になって、後から非常に大きな問題になってしまったという部分がございました。

ですので今回、これは学内ワーキンググループの総意ですけれども、基本的に出せるデータ、あるいはとったデータは全て公開するという方向で、透明性をとにかく確保すると

いうことを大前提に考えるべきなんじゃないかというのが今回の学内ワーキンググループでの結論でございます。そこで赤字で書かれておりますが、「①代議員会における投票結果を公開すべきか」というところで、基本はやはりこれは全て公開すると。公開する内容としては氏名。これはこれまでも代議員会に関しては、投票直後ですので辞退者が誰が出るかわからない状態で10人、あるいは10人ちょっとになるかわからないですけど氏名だけは発表するということがあったんですが、今回の学内ワーキンググループでの議論としては、辞退者を募ってから、辞退しなかった人の氏名は公開するというふうな方向にして、そのときに氏名だけでなく、公開を許可というか辞退しなかった方に関しては代議員会における投票の順位とか得票数というものも全て公開するというのを考えるべきではないかと考えております。

公開する対象は、もちろん東京大学という大きな大学ですのでステークホルダーというのは学内外にいるわけですがけれども、基本的には学内への公開と。ただ、現代の世の中で学内に公開したら、それは学外に出ていくというのはもう当たり前ですので、僕らとしては学内に向けて公開するというだけであって、最終的には得票数も含めてデータは外に出ても全然おかしくない状況ですけども、それをあえてちゃんとやって透明性というものをしっかりと外にも見せる必要があるんじゃないかということを考えております。公開する時期ですけども、それはさっき申し上げたとおり代議員会の終了後、辞退者を除く第1次総長候補者が確定したときに公開するというのを考えております。

議論としては、先ほども申し送り事項とかにもあったと思うんですけども、これは通常の立候補制による候補者ではなくて推薦による候補者なので、自分としては全く総長になる気がないのに推薦された結果、名前が出てしまって、10位までに名前が入ってしまって、それも全部得票数が公開されるというのは、そういう方にとってはやっぱり本意ではないだろうということで、そういった方へのプライバシーはしっかりと確保すべきではないかというご意見があったかと思えます。

ですので、今回我々が提案するのは、辞退者を除く方の全ての情報を公開するということで、そこに書いてあるとおり、代議員会に関しては10名の選出、辞退者を確認した上での絞り込みの前、総長選考・監察会議は第1次総長候補者から第2次総長候補者に絞り込んでいくわけですけども、その前に全て、氏名、順位、得票数というものを代議員会の委員全体に伝えますし、最終的には学内に関してもその情報はしっかりと伝えていくということを考えております。

今回の公開のイメージとしましては、資料2-2だったと思うんですけども、ここに書いてあるとおり、名前と得票数というものを辞退者を除く方全てに関して出すということを考えております。ここに書いてあるとおり、これはアイウエオ順で出すことを我々としては提案しよう。もちろんそれぞれに得票数がついていますのでソートすれば誰が1位かということはわかるわけですけども、総長選考・監察会議は主体的に総長選考のプロセスを進めなければならないと。なので、代議員会における投票あるいは意向投票、そう

いったものの順位だけに縛られて決めているわけではない、決めてはいけないということが国立大学法人になってからの方針です。我々としては得票数だけに縛られているわけではないですよという意味も込めて、こういうアイウエオ順で、正しい得票数という可視化できる情報はしっかりと出すという形での公開をするということを考えております。

繰り返しになりますけども、今回こういうふうな結論に至ったのは、とにかく透明性の確保がやはり最重要課題であろうということですので、公開するという方向に振っていくということを我々は考えているということでもあります。もちろんここで第1次総長候補者が決まって、その後、面接なども経て第2次総長候補者への絞り込みを行っていくわけですが、当たり前ですけど面接とかそういったものを総合的に勘案して絞り込みを行っていくことは我々がやらなければならないことですし、そういうプロセスで総長選考というのは進んでいるんだぞということを学内構成員にちゃんとしっかり伝える努力というものも、次回というか、来年の総長選考では非常に重要ではないかと。

多くの方が、どういうプロセスで、第1次総長候補者ってどういう意味があって、第2次総長候補者への絞り込みというのはどういう意味があって、意向投票にどういう意味があるのか。あるいは総長選考・監察会議というのが何をやる組織なのかということがわからないまま、少なくとも前は多くの方が総長選考に臨んでいるという部分がありますので、我々がしっかりと主体的に決めると。そのときにこういった情報を持って、我々はこういう理由でこういう絞り込みを行いました、あるいは最終的にはこういうふうな総長選考の結果、この方を絞り込みましたという形で総長を決定するというプロセスというものを進めていく必要があるのではないかなと考えております。

ですので、全ての情報は出すんですけども、順位ですとか得票数ですとか、そういったものはあくまで参考情報にすぎないといったことは何度か学内に対してしっかりと行っていく必要がありますし、絞り込みの説明というところに関してももちろんそういったことは言うていく必要があると思っております。

最後に、学内の部局長を対象に、前回の総長選考のプロセスの課題ですとか、あるいは問題点だったりとか、ここをこうすると変えるのをどういうふうに思いますかみたいな、そういったアンケートを3月4月にとりました。そのときに、第1次候補者に関する情報の公表といった項目もあって、そこに関しては70%以上の部局長が不要であると、公表は要らないというところにマルをつけていたというのが、これは個人の考えで部局の考えではないんですけども、学内の部局長個人の考えとして出てきております。

それだけを見ると今回の学内ワーキンググループの結果と全く対照的なものなんですけども、ただ中身を見てみますと、不要というのは、やはり先ほどのプロセスで、立候補したわけじゃないのに、あなたは全体の9位でしたというふうなことが公表されるのはいかかなものかということで、そういった望まない人に対する配慮というものが十分必要なのではないかと。そのために情報の公表は不要ではないかというご意見を持っている方がやはり多いということでしたので、透明性が必要だということは、やはりいろんなところで

それぞれの部局長というのは考えられておりました。

ですので、今回我々が提案するこのやり方というのは、しっかりと透明性を確保する、かつそういった形の配慮というものを、辞退者を先に募って情報を出していくというやり方によって、学内の部局長アンケートともそんなに大きな齟齬がないような提案になっているのではないかと考えております。学内ワーキンググループからの報告は以上です。よろしくお願いいたします。

【板東議長】 ご説明ありがとうございました。学内ワーキンググループから、「代議員会における第1次総長候補者の推薦における結果の取扱い」ということでご説明いただきました。今のご説明にありましたように、前回の混乱のかなり原因になったということで、今回大幅に変えて公開をしていくという学内ワーキンググループのご議論の取りまとめとなっております。この点につきましては、大きな変更ということですので皆様から積極的にご意見をいただければと思いますけれども、ご質問、ご意見いかがでございましょうか。――それではF委員、よろしくお願いいたします。

【F委員】 Eさんにちょっと伺いたいと思います。透明性という言葉が何度も出てきますが、透明性というのはプロセスの透明性が確保されるということが基本だと思います。そういう観点からすると、aさんが何票とったのか、bさんが何番目だったのかということまで含めた透明性ということが本当に求められるのかどうかについてどのようにお考えになったのかということ、教えて頂きたいと思います。

その理由は二つあります。一つはaさん、bさん、cさんが何票で何順位だということを全て公開する場合にはいくつか懸念点があると思っています。一つはその順位を見て、様々な形での枠外選挙運動みたいなことが起こりかねないということが気になります。二つ目に、第2フェーズ、第3フェーズというふうに進んでいく中で、必ずしも代議員会からの推薦の1番の方が選ばれていくということではないケースが当然あるわけですが、そのときになぜ1番が選ばれなかったのかということに対する説明責任というのはどう考えていくのかという点です。

選定のプロセスを想定すると、優位性というのは相対性の問題なので、この人が絶対的にここが優れているから選ぶということにはならず、この点ではこの人がこれぐらい優れているけれども、こっちの点ではもっと違う優れている人がいる。総合的に見ればこうだというような議論が当然想定されます。

従って、透明性というのはやはり手続論、プロセスの透明性を確保することが最も大事で、最終的に何をもちその人が選ばれたのかということについて最後は答えなければなりません。そこを詳細に全部公開していくというやり方は、むしろ校内の融和性を損なうというような欠点もあるのではないかと思います。校内議論で、今私が申し上げたことはどんなふうに議論されたか、教えていただくと大変助かります。

【E委員】 ありがとうございます。我々としても最初からこの案になったわけではなくて、やはりいろいろな案というものをもんだ結果、こうなったという部分がございます。

まずF委員からご指摘がありましたとおり、とにかくプロセスの透明性ということは何も絶対です。それは確実にやらなければならないということで、プロセスの透明性というところに関しては全く異論はなかったです。そのプロセスの結果、最終的にやはり絞り込みとかそういうことを行うことになったときに、結局、前回の総長選考のやり方、進め方で大きな疑義が生じたのが、やはり第2次総長候補者が選ばれたときに学内がかなり騒然としたと、そこから大混乱が始まってしまったという部分があって。それは第2次総長候補者として、今日時間があればそこまで議論したいところですけど、3名から5名という幅を持たせたような形で第2次総長候補者を絞り込むというプロセスに対して、一番少ない3名というのを選んできたと。

そのときにやはりもう一つあったのが、代議員会における得票数が一番多かった人というのがなぜか入ってないんじゃないか。そういった疑念が学内から上がってきて、そこで何かおかしいんじゃないかということで、意向投票は少し延期したほうがいいんじゃないかとか、そういった学内運動が起きてしまった。あるいは学外からのいろいろな、マスコミの報道ですとか、そういったものが始まってしまったという部分があって。やはりそこは、誰が1位かわからないから、逆に変な疑心暗鬼のような議論だったり、そういうのが出てしまったんじゃないかという部分があったというふうに我々としては認識しております。

ですので、今回この後、今日は時間がないかもしれませんが、第1次総長候補者から第2次総長候補者への絞り込みのプロセスというものは明確にルールを決めて、このやり方でやっていきたいと思います。もちろん最後にアカウントビリティは絶対必要なわけですが、最終的にこういうふうなルールを決めて選んだ結果、例えば4名になりましたとか5名になりましたという形で出すと。そのプロセスはしっかりとルール決めをするということは大前提なわけですが、そのときにやはり僕らが持っている、知っている得票数とかそういったものを出さないということの外に対するデメリットというものはかなり大きいんじゃないかというのが、我々学内ワーキンググループが考えたことです。

今回お出しした案というのは、とにかく100%透明性のほうに振ると。つまり名前と票が全部一致するような形で、この人は何票、この人は何票というのがわかるような形で情報を全て公開するといったほうの案になっております。

【F委員】 今のお話だと、代議員会からの推薦で1位の得票をとった人が第2フェーズで仮に今回落ちる、あるいは下位になる等も面接などをやるのであり得るわけです。そのときまた同じように、なぜ代議員会で1位になった人が入っていないのか、といった話になる可能性はありますよね。

【E委員】 はい、そのとおりだと思います。そして、それを説明できなければならないと思っております。

【F委員】 1位で何票とりましたということを公開すればするほど、そういう問題がより強くなってくる。

【E委員】 どうですかね。そこに関しては、学内ワーキンググループで全員が同じことを考えているわけじゃないですけど、個人的には票数がないほうが不安感というか、疑心暗鬼感はふえると僕は思っています。

【F委員】 そういうご意見も当然あり得ると思いますが、僕は代議員会で1位をとった人は、ずっとその分についてかなりアドバンテージを持って進むということになると思います。例えば面接、第2フェーズの人は、この1位の人を落とすべきではないのでは、といった考えが働く可能性がある。順位とか得票まで全部出すことがむしろ公平性を欠くというリスクも十分あり得ると感じます。パーフェクトなものはないのでどっちをとるかという話になると思いますけども、結論としては、プロセスの透明性を徹底的に確保するというところにとどめるほうが、客観性が確保されていく部分もあるということだけ、お伝えしておきたいと思います。

【E委員】 ありがとうございます。そういった学外からのご意見というのをたくさんいただくのが今日の一番の目的ですので、ありがとうございます。

【板東議長】 ありがとうございます。それではG委員、よろしくお願いいたします。

【G委員】 今の点、私も非常に懸念をしております。出せば出すほど、さらに出さなければいけなくなると。確かに透明性という意味ではそうであったほうがよいのですが、それがプラクティカルであるかということと、それから逆にそれが縛りになってしまう。公正な選択をするに当たっての足かせになる可能性があるという点に、私も同じ懸念があります。

また、公開する対象を学内としていますが、学内に公開するということは、つまり学内にとどまらず、もう学外も含めて全て公になるという前提で考えておくべきではないかなと。というのは、前回ああいうことがあった。前回の総長選考があれだけスキャンダラスに取り上げられた中で、当然今回の新しい総長選考・監察会議に対しての外部からの関心も非常に高いわけですよ。ここで公開を学内に限定したとしても、明らかに外にも流れるものであるという前提で、どこまで公開をするべきかを考える必要があるのではないのでしょうか。

この点、私は気になっていたのです。公開する対象というのを学内と限定することに本当に意味があるのかどうか。あるいは学内としたとしても、外にも漏洩するという前提で内容や時期を考えていくべきではないかと思います。

【E委員】 ありがとうございます。先ほどちょっと申し上げたとおりなんですけど、学内に出したとしても、もう瞬時に学外に出ていくのは今の時代当たり前ですので。実際に学内というのは、結局第1次総長候補者の名前ですとか、そこから絞り込まれた第2次総長候補者に対して意向投票できる人というのが今のところ学内となっているので、投票のための資料として出すのは学内の方というふうな形で書いているだけでありまして、この情報は必ず学外に出ていくといったことは理解した上での議論になっています。

【板東議長】 G委員、とりあえずよろしゅうございますか。

【G委員】 はい、結構です。

【板東議長】 K委員、お願いいたします。

【K委員】 ご説明ありがとうございました。今委員の方々から出たご意見はよくわかるんですが、私は得票数とか順位は、数字を出さないまでも、わかる形にしたほうがより公平性かなと思います。例えがいいかどうかわかりませんが、データを公開してないから文句は言えないでしょというのは極めて古いように感じるんですね。昔よくあった男性・女性の賃金差、組合もそんなデータはとってないと言って突っぱねてきたわけですね、本当はあるのにと。でも、そのやり方で押し切っていた。非常に古いような印象を私は持ちますので、やはりきちっと順位を出して。それに基づいて、もし仮に学内の先生方が例えば学長に推したい方が何か活動するということが、これは本当にいいかどうかというのはもちろんあるかもしれませんが、そういったこともやらないようにということはやちょっとやり過ぎかなと思います。

心配なのは、皆さんご指摘のとおり、じゃあ1位だった人がどんどん順位、次の第2次総長候補者のときに下になっていくとか選ばれないといったときに、それをどう説明するんだというところで。でも逆に、ここも説明できないといけないと思うんですね。なので、今のやり方が委員の中の会議で相談した結果この人になりましたということだと、もしかしたら非常にわかりにくいかもしれませんので、むしろそのプロセスのほうをもうちょっと誰もが。それはいろんな意見があるので、でもその結果を、この人たちが残ったというプロセス自体はまあ公正だよというふうに思っただけのようなものにするこのほうが大事かなと思いました。以上でございます。

【板東議長】 これについて、とりあえずはご意見ということでよろしゅうございますか。

【K委員】 はい、そうです。

【板東議長】 じゃあI委員、よろしくお願いいたします。

【I委員】 ありがとうございます。K委員と少しかぶるところもあるんですけど、E先生のお話を聞いていて思ったのが、正直、投票数を公開しても、今のプロセス上だと結局その後が不透明なので、私はより混乱すると思うんですけども。むしろ学内の先生方の問題意識というのは、これを公開することでその先の不透明性というのがより明確になるので、そこも含めてプロセスを改革していくというところに対しての問題定義がある上でこれなのかなというのをちょっと思いました。

先ほど少し、僕は今のプロセスだったとしても投票数があつたほうが納得するとおっしゃっていたと思うんですけど、そこに関してはよりもやもしちゃうのかなと私はいまだに思っているんですけども。私が考えている本当の問題定義はその先のところではないのかというところに対してはいかがでしょうか。

【E委員】 ごめんなさい。もう一回論点を。

【I委員】 すみません、論点に関しては、そもそもこの投票数というのを出したとしても、その先のところのプロセスというのが今明確な、投票数ってすごくわかりやすい客観

的な数字だと思うんですけれども、その先のクライテリアというのが今あまり明確になっていないので、投票で1位をとったとしても、その後どうなるかわからないというのがあると思うので。今までの意見としては、その先々で明確な数字というのが必ずしも反映されない結果になってしまうから、逆にあまり公開しないほうが混乱が起きないんじゃないかということだと思って。

私もそれに対しては同意なんですけれども、それは今のプロセスがあるという前提においてであって、明確な数字を公開していったほうがいいんじゃないかというのは、むしろその先の不透明性が今高いところに関しても、もっと客観的にわかりやすいものにしていったほうがいいんじゃないかという問題定義というのがそもそもあるというような形の理解でよろしいですかというのが論点です。

【E委員】 ありがとうございます。今、I委員がおっしゃったとおりでありまして、結局投票というのは、もう順位がつくというか、得票数だから数字があらわれるやり方だと思うんですけれども、一方で我々に求められていることというのは、そういう票とかの数に惑わされることなく主体的にあなたたちが決めなさいというのが、今の国立大学法人法での学長の選考の方針になっているわけです。

ですので、その票数というものはあくまで参考情報にしかないというところで、今日も多分時間がないから議論できないかもしれませんが、その絞り込み方法としてしっかりとしたルールを決めて。我々として考えているのは、10人以内の人、プラス経営協議会から上がってくる2人の方を合わせて、その中で我々の中の16人で投票して、例えば上位3人までは、そこはもう確実に第2次総長候補者に残しましょうというふうなやり方ですとか。そういったルールをもう総長選考が始まる前に全て決めて、それも場合分けに従ってこうやって決めましたという形で、基本的に我々が主体的に決めるというところはもちろんやっていくわけです。

そのときに、前回学内にいて投票した側からすると、やはり投票数というのがあるはずなのに、もう全部それを出さないで、しかもほとんど説明がなく、次に残った人はこの人ですというふうな、その説明だけというのに対する不信感というのとはにかく強かったですね。なので、あくまで私たちが主体的に選ぶというところは何度も学内の構成員に対してちゃんとしっかりと伝えていった上で、得票数はこうでした、でも我々はその中からこの5人を選びましたということをしてしっかりと説明するとき、得票数があることによる弊害というのはもちろん僕らも理解しているんですけど、ないことによる不信感のほうが大きいのではないかということで今回のような提案という形になっています。こういう形でよろしいでしょうか。

【I委員】 ありがとうございます。

【板東議長】 それではB委員、お願いいたします。

【B委員】 皆さんがおっしゃっているように、公開することによって1位の方がより優位になるのではないかと、あるいはその数字に総長選考・監察会議も引きずられるのではな

いかなど、いろいろな問題点は確かにあるかと思いますが、前回起きたことを考えますと、第1次総長候補者として選出された10人の方々の投票数とお名前がやはりきっちりと公開されることによって総長選考・監察会議としては透明性を確保しようとしている、プロセスもはっきり見えるようにしようという意思が伝わるのかなと思います。

その結果を踏まえて、その後のインタビュー、そして絞り込みの中で総長選考・監察会議が、主体性を発揮して絞り込みをしました、そして最終的に選びましたといったことを堂々と説明すれば、学内の方々にもより納得がいくのではないかと思います。前回起きたことが非常に疑念を持たれたというところを考えると、今回透明性を重視する、公開するという点に関しては、完璧な回答はない中で、よりよい選択ではないかと私は思います。以上です。

【板東議長】 ありがとうございます。じゃあL委員、お願いいたします。

【L委員】 すみません、意見を述べる前に、ちょっと確認というか質問なのですが、第3フェーズの5人以内に絞り込まれた後の意向投票ですが、この結果はどうなるのでしょうか。

【E委員】 そこに関してはまだ学内ワーキンググループでも詰められていなくて、まず第2次総長候補者への絞り込みのところまでということと議論をしています。もちろん一番重要なのは意向投票の結果をどういうふうに扱って我々が総長選考・監察会議として主体的に決めていくかということとすることで、そこはもっと活発な議論になるかなとは思っていますが。現状、第2次総長候補者で3人から5人を残すというところのプロセスまでをできるだけ透明なものをつくるためにはどうしたらいいかという議論で、今回はこの総長選考・監察会議にかけているといった状態になっています。

【L委員】 了解しました。ここは今後考えるということで理解しました。第2フェーズに関しては議論を伺っていて本当に難しいなと思いましたが、性悪論ではないですが、隠してもやっぱりどこかでリークするような、前回もそうだったわけなので。そういう意味で、私はやはり公開するのがよいと思います。以上です。

【板東議長】 ありがとうございます。ほかにいかがでございましょうか。

【F委員】 先ほどの質問と皆さんのご意見を踏まえて、さらに一言だけ申し上げたいのですが、それを採用するということは、皆さん方のおっしゃっておられるように、総長選考・監察会議の一人一人、あるいは総長選考・監察会議そのものが、そうした順番とか得票数とかを公開した上で、こういった理由でこの人を選んだと説明するということだと思います。第2フェーズ、第3フェーズがありますから、そう簡単ではないですが。

最終的には総長選考・監察会議が校内にも校外にもマスコミにも、相当なリーズニングと合理性を持って選んだということ、しっかりと伝えていくという相当重要な責任を負っているという事です。先ほどご意見があったように、そういう覚悟でやるからこそ、この公開というのは意味があり、そこに重要なポイントがあるだろうと思いました。

【E委員】 ありがとうございます。

【板東議長】 ありがとうございます。それじゃあH委員、お願いいたします。

【H委員】 ありがとうございます。本当に今までのご議論のとおりでして、実は学内ワーキンググループでもさんさん迷いながらこういう結論を出しました。代議員会での票数まで含めて公開することには、明らかに弊害はあります。数字がひとり歩きするのではないのかとか、総長選考・監察会議委員への働きかけが行われるのではないのかと、様々な懸念もございます。しかしながらその一方で、前回やはりトラブルになったのは、特定の個人の問題というよりは、総長選考・監察会議というものの中身がよく見えないのではないのか、あるいはこのプロセス全体の透明性に欠けるのではないのかということが最大の問題でした。これを乗り越えるためには、プロセスはもちろんです、いろんな数字まで出さないと納得を得られないのではないのかと考えました。本当に悩みながら、最終的にこれを出したほうがいいのではないのかという結論になりました。

今F委員がご指摘になった、まさしくおっしゃるとおりでして、このような数字を出せば出すほど、総長選考・監察会議に対するプレッシャーと説明責任は重くなると思います。この代議員会の数字だけに意味があるわけではなくて、求められる総長像もありますし、多様な論点、面接も含めて最終的に選ぶ結果、代議員会の1位とは違う人が残ることもあります。そのことをこの会議がきちんと説明する責任を負わされるということで、余計この会議の負担は強まります。それでも、このことが選考プロセス全体の信頼性を高めるためには不可欠であるという判断の結論です。以上です。

【板東議長】 ありがとうございます。なお、代議員会だけではなくて、経営協議会も候補を出すことができる形になっておりますので、それも含めてそれぞれかかわる方の責任の問題というのはより明確になるかなという感じはいたします。

M委員、お願いいたします。

【M委員】 学内委員の一人として、一言だけ発言させていただこうと思いましたが、今回、学内ワーキンググループで二つの班に分かれましたので、私は実はこちらの班とは違うほうの班の司会をしていましたけれども、その後、学内ワーキンググループ、あるいはそれ以前のメール等の打ち合わせでもご説明をいただき、まず懸念も、それからこの方針も納得したところです。

発言した一つは、これはその後いろいろな責任を当然ながら私たちは強く認識して行動しなくてはいけないわけですが、それが完璧であることはない。当然ながら、ある一定の批判はあると思っています。ただ、その一定の批判があったときに、それならばじゃあもっと不透明性に戻したほうがいいんだということに戻るといふうには、過去の経緯を考えて考えられなかった。というのが、私がE委員、H委員からの説明を受けたときにやはり考えたことでした。

それならば、今まさに私たちが期待されているところは、今こそ透明性について議論を進めてほしいということだと思いますので、私はこの方針に賛成をしたということをお伝えしたいと思いました。ありがとうございます。

【板東議長】 ありがとうございます。それからK委員、よろしくお願いいたします。

【K委員】 ありがとうございます。今回の場が、第2次総長候補者の絞り込みのやり方のところまでいろいろ議論するということなんでしょうかね。私も先ほども申し上げたんですけど、やっぱりここがすごく曖昧なところになる可能性、懸念が非常にありますので。だから私は先ほどから、もう順位なんかも全部公開したほうがすごく透明性が出ますし、その後いろんな方がいろんな対応するというのももちろんいいことではないかなと思います。新しく経営協議会からも候補者が出てきて、さらに面接でいろいろ話を聞いて、単に各委員だけが決めていくのではなくて、それに対してどう思うかというのを総長選考・監察会議の中で十分議論をし、そして決める。

全員が同じ、完全一致ということは恐らくないけれども、でも何らかの形でやはり次の候補者を決めていかなければいけないので。そのプロセスについて、私はこの投票があまりよくないというようなことを事務局からも何回かお聞きはしたんですけども、いろんな方がある程度少しずつ違う意見がまだ残りながらも、投票みたいな形で例えば最後、次の段階に送る3人なりを決めていくというので。外から見たときに、このプロセスで、中身はどうあれプロセスとしては公正だということがわかるような形でこのやり方を決めていくというのがすごく大事だし、これが今後生きていくんじゃないかなと思っている。それを再度申し上げたということと、もしそこを今回決めるのであれば、そこをきっちと議論できればなと思っているということです。以上でございます。

【板東議長】 ありがとうございます。ほかにいかがでございましょうか。ちょっと今日は時間的に絞り込みのところのお話までは行かなくなってしまいそうですけれども。――じゃあJ委員、お願いします。

【J委員】 すみません、1点だけ。透明性という中で、票の問題とか順位の問題がございますけども、それ以上に私は第2フェーズのところの面接、これのクオリティーがどこまであるのかというのが非常に重要だと思います。ぜひそこは、またご議論をいただきたいなと思います。

面接でほとんど投票すべき人というのを決めるわけですので、面接のありよう、面接時間のありよう。要は自分たちが面接をし、それに対する回答をみんなが聞いて、それをベースに投票できるということのための面接なわけですけども、その面接のクオリティーが悪いと投票の質も落ちるとというのが現状だと思います。そういう意味では、この面接というものをどのように設計するのか。それがその後のところにも非常に大きく影響してまいりますので、ぜひそこについては議論を深めていただくことが重要ななと思います。

もう1点だけ。経営協議会から推薦というのがございますけども、これは私は最低でも1年かかると思います。前回の場合はそのプロセスの時間があまりにも少な過ぎたような気がいたします。経営協議会からの2人の推薦というものに関してやるためには、それなりの人をまず選んで、その中から経営協議会で絞っていくというプロセスが必要でございますので、この前の推薦までのプロセスがものすごい時間がかかる。

そこをご理解いただいて経営協議会での推薦というものを、2行で簡単に書いてあるけども、実際には相当な時間と相当な議論が経営協議会の中でされませんといい答えが出てこないと思いますので、それに対する方法論というのもぜひご議論いただくことが重要かなと。それは経営協議会の仕事なんだと言えどそのとおりなんですけど、そうは言わずにトータルでの、いい、質の高い総長選考にするためには、そのぐらいの努力が必要かなという気がいたします。以上です。

【板東議長】 ありがとうございます。すみません、ここの時間がほぼ来てしまいました。今もいろいろご指摘ありますように、第2次総長候補者に至るまでの絞り込みのプロセスのところを本来なら今日ご説明いただいてご議論いただき、あわせて意向投票前の段階まで行ければと思ったんですけども。第1フェーズのところ非常に大きな変更案を学内ワーキンググループのほうでご提案いただいているということで大変ご議論がございましたので、次回に、今の面接その他、第2次総長候補者絞り込みのところも含めて、またご議論をさせていただければと思います。

今日はちょっとご議論が完全に収束はしなかったなと思います。ただ、透明性のところの必要性というのは、いろいろな形で今日ご議論いただけたのかなと思います。学内ワーキンググループのほうも、先ほど非常に悩みながらというお話がありましたけれども、前回の総長選考があまりにいろんな意味の不信感を呼んでしまったということがあって、そのところを少なくとも今回の総長選考においてはかなり重視して考えていかざるを得ないのではないかなというのは、私、個人的には感じているところでございます。

その中で、この総長選考・監察会議の委員お一人お一人も含めて、総長選考・監察会議全体も含めて、役割、責任というのが非常に大きくなるなという感じはしておりますけれども、その覚悟を持って、ある程度臨まなくてはいけない、そういうもともと重要な局面なかなという感じはしております。

ただ、やり方、公開の仕方とかいろんな技術的なところも含めて、あるいはどこの時期にどういう形でというのも含めて、まだまだ第2次総長候補者選考との関係でもさらに詳細なご議論も必要になるかと思っております。今日のところは中途半端な形で申しわけございませんけれども、次回に今日ご説明いただくはずでした次のステップのところも含めて、改めて全体のところ、意向投票前の絞り込みまでのご議論をまとめていただければと思っております。

すみません。私のほうも、第1議題も時間が押してしまって、さらにこの議題は非常に重要な議題でございますので、時間が押してこういう形になって申しわけありませんけれども、よろしくお願ひしたいと思います。

【E委員】 板東先生、ちょっとよろしいですか。

【板東議長】 はい。

【E委員】 今日の資料の11ページが第2次総長候補者の絞り込みで、我々が今考えている案ですので、説明は。

【板東議長】 じゃあ、ご説明をいただくことにしておきましょうか。

【E委員】 いや、説明というか、簡単に言います。先ほど申し上げたとおり、代議員会における票に縛られることなく、我々が主体的に選ばなくちゃいけないということは確実なので。代議員会における票だったり、あるいは先ほどご指摘があった面接は本当にクオリティーが非常に重要だと思うんですけど、面接の結果を経て、我々は最初にまず投票で上位はちゃんと決めて。我々16人の中の投票で1人3票と書いてありますけど、それで上位3人とかを決めて、3人でこれでもう十分だろうとなったらそこで終わってもいいんですけど、多分やはりいろいろな多様性とかいう観点を考えたときに、まだこの人は足りないんじゃないかという形で4位5位。最終的にトータル5人までは、その後は議論して追加すべきかどうかというので決めていくというのが大ざっぱな、この11ページに書いてある流れです。

細かいことは、またこれから詰めなくちゃいけないことはたくさんあるんですけども、大体こういう方向性で第2次総長候補者の絞り込みというのを考えているということだけ今日知っていただいて、また次回の会議に臨んでいただければなと思います。それまでに学内ワーキンググループのほうではもう少し細かい場合分けも含めた形での案は出しますが、方向性としてはこんなことを考えているということだけお伝えしておきたいと思えます。以上です。

【板東議長】 はい、わかりました。次回本格的にご議論いただくとして、今とりあえず何かこの点は聞いておかなくはという質問はございますでしょうか。

【L委員】 よろしいでしょうか。

【板東議長】 はい。じゃあよろしくお願いします。

【L委員】 1点だけ、すみません。最初の得票数ではなくて、この上位3名というのは総長選考・監察会議委員の中での投票の3名ということですか。

【E委員】 はい、そのとおりです。

【L委員】 ということは、最初の投票で1位だった人が、必ずしも選ばれることはないということですか。

【E委員】 はい、そのとおりだと思います。1位というのはやっぱり意味があると思うんですけども、それが16人に刺さらないというのは何か理由があるはずなので、それで5位まで残らないということはある得るとは思っています。

【L委員】 わかりました。ありがとうございます。

【板東議長】 はい。ほかに何かご確認のご質問はございますでしょうか。——はい、ありがとうございます。第2次総長候補者のところについては時間が足りなくなって申しわけございませんけれども、資料も今回いただいたのに加えて、またご議論をさらに追加されるものを次回いただく可能性があると思いますので、それも踏まえて次回ご議論をさせていただきますだけだと思います。申しわけありません。時間が超過をしてしまいましたので、次回にまた重要なご議論をいただければと思っております。

それでは、議題3の「その他」ですけれども、何かこの際、ご質問、ご意見ございましたら。――特によろしゅうございますでしょうか。

それから、もうご紹介だけでございますけれども、議長も毎年選ばれた段階で所信表明が必要だということになっておりますので、了解事項の5の(2)に基づく議長の所信表明についてホームページのほうで公表させていただいております。公正・中立にということで、十分な議論、意見交換をしていきたいということを書かせていただいているものでございます。

それでは、事務局から連絡事項についてご説明があれば、よろしくお願いいたします。

**【事務局】** 事務局でございます。前回の議事要旨についてでございますが、内容等よろしいでしょうか。――はい、ありがとうございます。

次回の開催は、6月20日金曜日1時半からオンライン開催を予定しております。なお、総長選考・監察会議の後に開催される経営協議会に對面でご出席される委員の方におかれましては、安田講堂内に会議場所をご準備させていただき予定です。詳細については、また追って連絡させていただきます。事務局からは以上でございます。

**【板東議長】** はい。経営協議会のほうではご説明をして意見をいただくという形になるかと思うんですけれども、教育研究評議会についても、例えばE委員からご説明いただくとか、そういう形になりますでしょうか。

**【事務局】** はい。それを予定しております。

**【板東議長】** そうですか。運営方針会議に対しては、どういう感じになりますでしょうか。

**【事務局】** 運営方針会議は最終的に9月に学内会議にかけ始めたときに、一緒に意見照会をパブコメと同時にさせていただこうかなど。現在のところはそういった予定で考えております。

**【板東議長】** そうですか。それじゃあ経営協議会や教育研究評議会とは、ちょっとその時期はずれるということ。

**【事務局】** そうですね。こちらは申し送りにも意見交換をするということが書かれておりますので、そういった面で今の段階でざっくばらんに意見を伺うとともに、経営協議会などは今後の予定なども、推薦の話とかもあるかとは思いますので、そういったことのスケジュール感というのもお示ししたほうがよろしいのかなと考えております。

**【板東議長】** はい。どうもありがとうございました。今日は申しわけありませんでした。私の議事進行の仕方も悪くて、ちょっと中途半端な形になって申しわけございませんが、次回も活発なご議論をいただければありがたいと思います。

会議の最後に、いつものように監事に対して議事進行についての意見を述べる機会をということが定められておりますので、今日、C監事、それからD監事にご陪席いただいておりますので、両監事から議事進行についてのご意見をいただければと思います。

それでは、C監事、D監事の順番でよろしくお願いいたします。C監事、よろしくお願

いします。

【C監事】 監事のCでございます。特に問題ございませんでした。

【板東議長】 はい。D監事、いかがでございますでしょうか。

【D監事】 Dです。私も特に今日の議事進行については意見ございません。

【板東議長】 ありがとうございます。それでは、大変活発なご議論をいただきまして、ありがとうございます。事柄が一つ一つ非常に重大で、いろんな経緯もありということで、今日のご議論が十分にできなかった部分もございますけども、次回も含めまして、またしっかりご審議いただければありがたいと思っております。

本日は、大変お忙しいところをありがとうございました。引き続きよろしくお願い申し上げます。

(終了)